

一般就労への一歩を踏み出すまで

～本人・家族・関係機関・支援者・企業の協働から見えた成長～

○谷猪 幸司（株式会社ヴィストコンサルティング センター長/就労支援員）

1 はじめに

本論文では、知的障害のあるAさん（29歳男性）が、就労移行支援事業所、チャレンジ雇用（I県の実習制度）、A型事業所での経験を経て、一般就労へと踏み出した事例について報告する。特に、A型事業所での7年間の支援の中で、Aさん本人の内的変化、家族・関係機関との連携、そして支援者としての関わり方の変遷を振り返りながら、支援の要点と今後の支援の在り方について考察する。

2 Aさんの背景と特性

Aさんは、特別支援学校卒業後、多機能型の就労移行支援事業所を利用し、和菓子の小箱の作成および和菓子を詰める作業の体験を行っていた。その作業体験を通して巧緻性が求められる作業は難しいということを理解するに至った。その後、1年間、就職活動を行うもなかなか決まりなかったことから障害者就業・生活支援センターより紹介された地方機関でのチャレンジ雇用にて3年間、シェッダー処理や郵便物の仕分けなどの事務作業に携わり、一定の勤務実績を積み上げた。

チャレンジ雇用終了後は、現在の就労継続支援A型事業所に入所。およそ7年間、段ボールの出荷作業や梱包作業に携わった。Aさんは比較的おとなしく、人前で話すことや新しい作業への取り組みに消極的な面が見られた。当初は作業現場でも意欲が低く、商品の影に隠れてしまうような様子が見受けられた。

3 支援の経過

(1) 作業への動機づけ

Aさんに対しては、日々の面談を通して、任せられた作業の意味や、自分の役割が作業全体の中でどう位置づけられているかを丁寧に説明した。また、将来に向けたキャリア形成の重要性や、今できることを積み重ねる意味を根気強く伝え続けた。

意欲の向上を目的に、作業の結果を「見える化」することに取り組んだ。具体的には、1日あたりの出荷個数、作業の正確さ、1個あたりに要する作業時間などをデータとして記録し、Aさん本人と一緒に振り返る機会を設けた。データを通して、自身の成長を実感できるように工夫したことが、作業への取り組み姿勢を前向きにする要因となった。

(2) 成長の兆し

最初は、指示がなければ動けず、単調な作業に飽きやす

かつたAさんであったが、データによる可視化と肯定的なフィードバックにより、自ら「昨日より早くできるようにしたい」「間違えずにできた」と振り返る場面が増えていった。特に、1個あたりの作成時間が短縮されたことや、ミスが月ごとに減っていく様子を見て、「仕事ができている実感」が芽生えた。

また、業務日報にひとことコメントを記載する取り組みでは、「今日は最後まで集中できた」「○○さんと協力できた」など、内面的な変化が見えるようになった。自己評価の視点を持ち始めたことが、次第に自信へつながっていった。

表1 ピッキング時間表

ピッキング時間表

名前		Aさん	
No	作業内容:ケース	2024年10月14日	2025年4月8日
時間(秒)	1回目	100	90
	2回目	22	48
	3回目	24	18
	4回目		18
梱包数(個)	1回目	65	93
	2回目	15	56
	3回目	10	20
	4回目		15
1個当たりの時間	1回目	1.54	0.97
	2回目	1.47	0.86
	3回目	2.40	0.90
	4回目		1.20

(3) 働きやすい環境

取り組みを継続していく中で、周りの人間関係についても大きな要素として左右されることが見えてきた。

Aさんの中で学生時代から就労継続支援A型に至るまで、周りから怒られることが多かったと相談支援専門員やAさんからアセスメントを通して伺うことがあった。

作業の生産性や精度を高めていくことによって人から褒められることや認められることが増えていき、その結果、仕事についても意欲的に取り組むことができるようになっていく傾向が見られた。Aさんの表情からも笑顔が増えていき、「誰かに頼られること」＝「人から認められる環境」が就労する上で大きな要素を締めていることが判明した。

4 家族・関係機関との連携

Aさんの成長に伴い一般就労を目指していくことになったことから、本人だけでなく家族や関係機関との連携も密になった。日々の様子を家族に共有し、家庭でもAさんの

変化を支えていただけたよう、情報共有を重視した。特に兄弟・姉妹との関係が深く、定期的な面談にも同席していただいたことで、支援の方向性を統一することができた。

当初はA型事業所に残り続けたら良いという想いであつた家族も本人の成長と日々の変化に対して肯定的に感じていただき、就職活動に対して応援いただけたような体制を整えていくことができた。

また、相談支援専門員とも連携し、「将来的に一般就労を目指したい」というAさんの思いを共有。就職に向けた準備を段階的に進めることとなつた。

相談支援専門員にも職場実習の機会が得られたことを積極的に共有し、職場実習にも同行いただくことができ、Aさんの作業意欲の変化と一緒に確認することができ、配慮が必要な箇所やAさんに頑張ってもらう必要があることを本人と同じ目線で一緒に確認することができた。

5 就職活動と実習の経過

(1) 多様な職場実習の経験

一般就労に向けた活動として、複数の職場見学・実習を行つた。スーパー・マーケットでの品出し作業、牧草加工業務、家電量販店での商品整理及び清掃、品出し作業など、様々な環境での実践を通して、自身の得意・不得意を明確にしていった。

実習を重ねる中で、Aさんが「人と関わりながら体を動かす作業」にやりがいを感じていることが判明した。ただし実習を重ねたことでデメリットも出てくる結果となつた。Aさんの住まいにおいて、交通手段が限られていたことから、通勤可能な就労先候補もどんどん減っていくこととなつた。

(2) 介護施設で実習の機会

その後、根気強く就職活動を続けていき、徒歩圏内で介護施設での職場見学の機会を創出することができた。見学先で、支援員と一緒に見学を行つた際に、ご高齢の利用者への配慮や気遣いを行うことができており、Aさんの優しい一面と業務内容がマッチしているのではないか?と可能性が見えてきた。そこでAさんと話し合いを行い、業務体験へと進むこととなつた。業務体験では利用者への挨拶や清掃業務に対しても丁寧に取り組む姿が見られた。

清掃業務では、ポータブルトイレの清掃を任せられることがなつた。Aさんの中では、匂いや汚れへの抵抗感について一定の不快感は感じているものの、嫌ではあるが、できることはないという感想を得た。

指揮命令者からの評価としてはAさんに任せたことで、以前よりも奇麗になっていると複数の職員から声が上がり、大変助かっていると評価を得た。また指示通りに動き、手順通りの仕事ができており、状況に応じた判断も

できている、という評価を得られた。

この評価に対して、Aさんとしては照れくさそうに笑顔を見せられ「この仕事なら続けられると思う」といった前向きな言葉が出るようになった。

6 就職の決定と今後の展望

こうした一連の取り組みの末、Aさんは地域の介護施設に清掃作業員として採用されることとなつた。Aさんが自ら「働いていきたい」と声にしたこと、家族や支援者の後押しがあったことが、就労への一歩を支えた。

今後も、定着支援を通して継続的なフォローを行うと同時に、企業側とも連携を取りながら、Aさんが安心して働き続けられるような支援体制を構築していく必要がある。

7 考察

本事例を通して明らかになったことは、Aさんの成長の背景には、「関係性の積み重ね」「見える成果」「共通の目標設定」が不可欠であるということである。支援者だけではなく、家族・関係機関・企業が連携し、それぞれの立場からAさんを理解し、支え合つたことが、最終的な一般就労の実現につながつた。

また、A型事業所において、短期間での就職を目指す支援だけでなく、長期にわたつてAさんのペースで成長を支える姿勢が重要であることが示唆された。単なる「訓練の場」としてではなく、「居場所」や「役割意識を育てる場」としての機能を持つことが、本人の主体性を育むうえで大きな意義を持つ。

8 今後の課題

本事例から、一般就労に至るまでの過程では、長期的な支援と関係機関との連携が重要な役割を果たすことが明らかとなつた。一方で、新たな職場環境への適応には時間を要するが多く、安定した就労の確保に加えて、業務範囲の拡大を可能とするスキル向上支援が不可欠であり、長期的なキャリア形成を見据えた計画的かつ段階的な支援体制の構築が今後の課題として挙げられる。